

## 祥明(サミョン)大學校交換留学報告

文学部 英語英米文学科

菊川 和恵

2006年、私は交換留学生として祥明大学に行った。約10ヶ月の留学生生活を終えて改めて振り返ってみると私はここで新しい自分を発見した。

韓国への交換留学を2005年の夏、最初は留学なんて全く考えていなかった私だが、ほかの国への留学を決めた友人たちと話をしているうちに、自分も留学したいと思うようになった。2003年に文化探訪団として韓国を訪れたときに会った友人たちと彼らの言語とともに話したいと思ったのが何よりの理由だ。韓国語を学びたい、韓国の文化が知りたい、韓国人と触れ合いたい、そういう気持ちが私の背中を後押ししてくれた。

祥明大学での私の学校生活は先生方、友人、先輩、後輩たちの活気と優しさで包まれていた。授業ではわからないところを教えてくれ、毎日昼食に誘ってくれ、夜はお酒を飲もうと言ってくれ、週末はソウルに連れ出してくれ...彼らにしてもらったことは数えられないほどで今でも考えれば心が感謝の気持ちでいっぱいになる。



よく「今まで辛いこととかなかった？」と心配されることがあったが本当にそれは一つもなかったように思う。ルームメイトであるあかりとも毎日ケンカもせず、穏和に過ごせてこられたし、学校の中でも私たちはいつも友人と笑いあっていたのだから。

あえて言うならば、自国の歴史、文化に対する知識を持っていれば良かったということ。そうすれば

友人たちにもっと日本を良く知ってもらえたのにと少し後悔している。

留学生活を通して多くの人との出会いがあった。日文科の人たちはもちろん、英文科、漫画科、映画科、体育科、人と話す機会が多くあった。そして、学校寮に住む他国からの留学生。自分が行動すれば行動するほど、また、ほかの人と交流しようとするほどに知り合いの幅が広がり、そしてそこから多くの人々の考えを聞くことができた。人の考えを聞くことで新たなものの見方も生まれ、そういうものすべてが自分の糧となり、そして今の私がいる。留学して間もない頃の私と今の私とでは確実に人が違っていることをわたしは感じている。

そんな風に考えられるようになったのも、私のまわりにいるすべての人のおかげだ。留学を勧めてくれた日本の友人、優しく送り出してくれた両親、いつも私の生活を気にかけて

てくれた日文科の先生方、お酒を飲みながら語り合ったオッパー(男の先輩)たち、優しく話しかけてくれたオンニ(女の先輩)たち、明るく元気な後輩たち、そしていつも一緒に過ごした友人たちと私の良き理解者であるあかり...すべてが私の大切に大好きな人たちだ。

留学生活は終わってしまったが、私の記憶には一生忘れられないものとして残るだろう。それくらいかけがえのない日々だった。いつかまた韓国、または日本でみんなと会える日が楽しみです。

